

社会人大学院の充実

森村 英典

1. 理工系大学院教育の新潮流と 社会人大学院

「理工系大学院教育の新潮流」というテーマで本号の特集を組むので執筆せよ、とのご下命をいただいた。筆者がいわゆる社会人大学院に勤務していたため、これこそ「新潮流」の1つと見てくださった編集委員会のご判断に敬意を表しつつ、主としてそこでの経験とそれにもとづく私見を述べさせていただきたい。

厳密にいうと、筆者の勤務した筑波大学経営システム科学専攻は理工系とはいいかねる。文部省の扱いは文系であるらしい。学内では準理工系として扱われていると理解している。授与される学位は、初年度は経営学修士、2年目の修了生からは、修士（経営学）と修士（経営システム科学）とである。しかし、この専攻のスタッフの半数以上はわがオペレーションズ・リサーチ学会の会員であるから、本誌での特集が意味する理工系という枠にはおそらく完全に含まれるであろう。そして、社会人大学院ということでは、まさに純粹の社会人大学院である。学生の全員が昼間企業等に勤務しながら夜間は大学院に通ってきており、社会人と学生の2つの顔をもっている。

さて、その筑波大学経営システム科学専攻であるが、東京都文京区大塚の旧東京教育大学跡に残っている筑波大学の大塚キャンパスにおいて、平成元年の4月、カウンセリング専攻とともに修士課程のみの大学院として発足した。翌年4月からは、企業法学専攻も加わり、毎年120名くらいの学生を入学させている。火曜日から金曜日までの18時20分から21時まで、土曜日13時45分から19時35分までをコアタイムとして授業を行なっているが、ゼミなどはこの時間帯からはみ出して行なわれることも多いし、学期間の休みの期間に集中講義がしばしば行なわれている。修了に要する単位数とそれを与えるための授業時間数は、表面上は通常の昼間の大学院と同一基準であるが、密度が濃いので、実質の授業時間数はずっと多

いであろう。

ここではまず、このような専攻を受験した方々のプロフィールや通学した社会人学生の感想などを要約して述べることから始める。より詳しい資料としては[1,2]などを参照していただけるとありがたい。また、筆者はこれらの経験をベースに、21世紀に向かっている社会人リフレッシュ教育は大学院が主な受け皿になるべきであると考えているが、それについては[3]に書かせていただいた。その一文とは重複を避けながらも、これからの大学院教育の新潮流の一翼を担うと思われる社会人大学院の在り方についての私見を、ここでも述べさせていただくつもりである。

2. 筑波大学経営システム科学専攻の学生

経営システム科学という語は、われわれの専攻を作る際に作った新造語かもしれない。経営・システム科学なのか経営システム・科学なのかと、スタッフや学生の間でも疑問が出される。筆者は、この専攻を発足させるにあたって、その構想を描いた張本人ではあるが、この専攻名は大学の執行部から与えられたものである。わがオペレーションズ・リサーチ学会の元副会長であった渡辺浩先生が作られたものらしい。筆者は上記の疑問に正確に答えられる自信はないがどちらかといえば後者で、経営システムに関する科学を意味すると理解している。とにかく気分的にはよい響きをもったことばで、われわれの専攻がめざす経営学、数理科学、計算機科学の融合された分野を表わす語としては適切であると思っている。

企業に限らず、大学や公共団体も含めてほとんどの組織においては、経営というアクティビティがぎわめて大切で、しかも年々複雑さを増す経営環境の下で適切な経営を行なうには、そのアクティビティの行なわれる場をシステムとしてとらえ、そのビヘイビアを科学的に分析追及する必要がますます望まれていることは、本誌の読者に対して改めて強調するまでもないことであろう。つまり、経営システムの科学を発展させることが期待されている、と認識している。

経営システムを対象とするからには、少なくとも経営

もりむら ひでのり 筑波大学

〒112 文京区大塚3-29-1

学、数理学、計算機科学の3分野の成果をその基礎として利用するであろう。従来からも、そのようなアプローチは実行されていた。たとえば経営科学、情報科学、情報システム論などの分野が形作られてきている。経営科学は経営学と数理学をその大きな基盤としているし、情報科学は計算機科学と数理学に根があるといえよう。経営学と計算機科学との結びつきはまだ十分とはいえないかもしれないが、情報システム論といった形で徐々に1つの分野に成長しつつあるといえるであろう。しかし、3分野が対等に混ざり合ったものではない。完全に3分野のウェイトが同等であることを必要とする場合は、必ずしも多いとはいえないと思うが、それでも、2分野の知識だけではうまくないというケースは、これからますます多くなる傾向にあると思われる。それで、特に社会人を対象とする教育では、3分野に目の配れる人材養成が期待されていると考えている。

当オペレーションズ・リサーチ学会の会員にも上記の3分野の出身者は多いが、その事実も、上の見解を支持するものであろう。筆者は、この3分野を融合した分野で実務の感覚に裏づけられた課題が追及されるところにこそORが今後一層の発展をする場があると感じている。そのような基本認識から当専攻の設立が構想されたので、当専攻がそのような学問研究のメッカとして育ててほしいものと念願している。それはともかく、当専攻では、経営学修士とともに工学修士の学位を授与することが可能なスタッフの人材配置を行なっている。ただ、発足当時は、1つの専攻で文・理両系の2種の学位を出すことに抵抗があったようで認可されなかったが、学位名称を変更する際に、前記のような2種の学位を授与できるように改めた。とはいうものの、当専攻では、2種のコース制をとることは毛頭考えていない。各自の修士論文のテーマや受講科目には文・理いずれかの系統に若干のウェイトづけがされるのは当然であるが、基礎的な目配りは3分野に通暁した人材の養成を意図しているから、2種類のコースを設けて文・理の間に壁を設けることは全く考えられていない。修士論文には、3分野にまたがる知見が見られることは望ましいこととして推奨しているので、たいていの論文にはそれが反映されているし、数多くの修論の中には3分野のいずれにもかなりコミットしたものも実在している。

学生は、もともとは文・理いずれかの系統に分けられる学部を卒業してきているが、その後の社会人生活で、そのような分類にいつまでも安住してられないという

経験を経てきている。それゆえ、理工系の学部の卒業生、なかには修士や博士の学位取得者が経営学の勉強のために当専攻に入学を希望したり、反対に文系各学部の出身者が、計算機や数理的思考に慣れることを求めて入ってきている。その意味では、当専攻は構想どおりの学生を集めているといえるであろう。

さて、学生のプロフィールは、一概にはいえないほどバラエティに富んでいる。そのことが全般的なプロフィールといえるかもしれない。年齢は25才から55才程度までにわたり、職位でいえば部長さんからヒラ社員まで、なかには取締役という人もいる。職種も、経理畑もいればSEもいる。研究者もいれば公務員もいる。ディーラーもいるし技術者もいる。全く千差万別、さまざまな人たちが同じ学生として集まってきている。世の中、どの世界にも勉強したがついている人はいるものだ、と改めて感心するほどである。

3. リフレッシュ教育の効果

4年前に当専攻が発足した当時から、TVや新聞雑誌等のマスコミがかなりとりあげて話題にしてくれた。最近では、某転職雑誌が「超難関筑波大学経営システム科学専攻」という中吊り広告を手線に出して、まだ完全に忘れ去られたわけではないけれども、一時のようなニュース性はさすがになくなったためか、とりあげられるチャンスは減ってきた。ところで、当初の頃のマスコミの視点はほとんどワンパターンで、「昼間しっかり働いているのに夜また勉強に2年も通うとは、世の中には変わった人種もいるものだ」という一種の驚きであった。それだからこそ、ニュース性をそこに感じていたのであろう。そのため、課長さん学生とか、大学院の子供と一緒に大学に通う熟年学生とか、エリートOLとか、そのような学生をターゲットとしたものが多かったように思われる。

まさに、世間的にいえば、「何を今さら」という感じの人も学生になったのである。彼らは、いったいどんな期待をもって、入学を志願してきたのであろうか。そして、彼らにとって、当専攻での学生生活には実際どんなメリットがあったのであろうか。それに答えるには、彼らの1人が口にし、他の多くが賛同した名せりふ「ここにきて、私の人生は2倍になりました。」を挙げておこう。別の学生は、その時しみじみと述懐しながら、夜間の大学院に通うようになって日常の仕事もかえってよく進むようになった、というのである。仕事のやりくりが

うまくなって、短時間で集中的に仕事をこなす術をおぼえたという。反省してみると、それまでは何となく仕事に向かっていた、といていた。

そういった自己改革の契機になった人もいるが、すべての学生は一致して、ふだんつきあえない人々と友人になったことのメリットを挙げている。これは十分に予想されたメリットではあるが、たとえば50才の部長さんと25才のヒラ社員とでは、同じ会社にいれば、対等な立場で話ができないが、ここにくれば全くの同期生であるから、グループの討論でも対等であるし、酒の入ったコンパでも対等である。そこで、年齢の差を超えた話題にぶつかり、日ごろ考えていなかった見方を知ることになる。

極端にいえば、学生という身分を与えさえすれば、このような場は設定できると思われる節もないではないが、しかし、そこに期限をつけて取り組みを課せられた作業や討論があると話は真剣になり、他人の意見や知識が身になるのであろう。それは、専業学生のサークルで、楽勝科目のノウハウを先輩から後輩に伝える図式とは似て非なるものがある。これは、現役の社会人を集めた大学院であることによる大きなメリットであらう。

5. 21世紀と社会人大学院の充実

21世紀はもう目の前に迫ってきているが、そこには、地球環境問題やエネルギー危機、経済発展や南北問題、高齢化社会や国際化等、難問が山積している。これに立ち向かうには、人間はますます賢くならなくてはならない。当然一層の勉強を誰もが必要とする。それに備えるには、幅の広い知識と意欲を供給しなければならぬ。高等教育機関がその役割のなにかしかな部分を担当する社会的義務を負っている。

これからは、すべての人々が地球的視野に立って善悪の判断のつけられるようになることが望ましいであろう。具体的には、他人や他民族との交流が自然にできるために、コミュニケーションの高い能力が必要となるで

あろう。いいかえると、世界共通のことばを自由に書き、読み、話せる能力と、他人の意見を聞いて内容を的確に判断できるための知識、そしてコミュニケーションのための道具を自由に使って自己の意見を要領よく表現できる能力が必要と予想される。もちろん、情報を発信するためには、発信する価値のある知見を産み出していなければ意味がない。それには、各人が専門とする分野ですぐれた研究や開発あるいは知識の集約を遂行する能力の向上が要求される。

そのような能力は一朝一夕にはできないから、大学時代にその基礎を身につけ、社会に出てから各人の立場に応じて必要な知識を獲得するシステムを社会的なインフラとして整備しなければならない。その際、その要請の受け皿になるのは、研究能力の充実した大学院であろう。大学院はどことも社会人を受け入れるのが当たり前であり、社会人学生と専業学生と研究スタッフとを豊富に揃えて、その共同作業として高度の研究を行なっている、という姿を筆者は夢見ている。

誌面の制約上、理工系らしい部分について若干なりとも細かく触れる余裕がなかったが、筆を擱くに当たり、これからの大学院教育の新しい潮流として、文・理にかかわらず、片手間やお題目でない社会人受入れ態勢の整った研究能力の高い大学院の整備が志向されることを切に希望していることを付言したい。

参 考 文 献

- [1] 斎藤喜久志「大学院教育の新しい発展——夜間大学院の社会人学生の調査から——」IDE—現代の高等教育, No.331, 1992
- [2] 鈴木久敏「社会人大学院で学ぶ——筑波大学大学院の社会人受入れ——」教育と情報, 平成4年4月号
- [3] 森村英典「21世紀へ向けた社会人のための高等教育」フジ・ビジネス・レビュー, 富士短期大学経営研究所, 第4号, 1992